

演題番号：1

演題名：豚疣贅性心内膜炎を伴う敗血症の発生状況調査

発表者名：○宮嶋海、岡野祥

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

疣贅性心内膜炎（以下疣心）とは、細菌感染による心臓内部への菌塊や炎症性産物の器質化により疣が形成される慢性の疾病である。と畜検査で疣心が認められた場合、「敗血症」を疑い疣と臓器等の細菌検査を実施し、「疣」と「臓器・リンパ節・筋肉のいずれか1カ所」で同一菌を検出した場合に全部廃棄処分となる。当所では近年、疣心を伴う敗血症が増加傾向にあるが、その要因は明らかになっていない。そこで今回増加の要因を探り、と畜検査に役立てるために本疾病で保留となった個体のと畜検査データを解析したので報告する。

2. 材料及び方法

平成21～28年度に管内と畜場に搬入された豚のうち、と畜検査で疣心が確認され、敗血症疑いで保留となった個体のうち「豚丹毒」を除いた334個体を用いた。保留記録簿及び細菌検査結果を精査し、年度別の発生状況や検出菌、疣及び臓器所見等の解析を行った。

3. 結果

敗血症の陽性が173個体、陰性が161個体だった。年度別発生数は平成21～23年度まで6件以下で推移し、平成24年度の16件から増え始め、平成26年度には9件になるが平成27年度からは著しい増加傾向を示した。月別では7月と12月に増加傾向を示した。発生農場数も平成21～23年度まで5件以下で推移し、平成24年度からは増加傾向を示したが、毎年散発的に発生する農場が数件みられた。特に平成28年度には特定の農場で43件発生した。検出菌は全部で9属22菌種確認され、その約75%が *Streptococcus suis*（以下 *S. suis*）で、次に多いのは *Streptococcus dysgalactiae* subsp. *equisimilis* であった。*S. suis* の検出数は疣心の発生数と同様に近年増加傾向を示した。疣の形成部位は左心側で最も多く認められ、疣の大きさは0.1～5cmまで様々であった。主要臓器における細菌検出率は脾臓、肝臓、腎臓の順に高かった。また、今回の調査では敗血症陽性個体の約30%で腎臓に点状出血がみられた。

4. 考察及びまとめ

本調査によって、疣心を伴う敗血症の増加は *S. suis* の増加によるものであったことが明らかになった。*S. suis* の増加は特定農場での多発や新規発生農場の増加が要因として考えられた。敗血症と臓器病変との関連について本調査では明らかにできず、臓器病変から肉眼的に診断することは困難であると考えられた。

今後もデータの蓄積と解析を継続して行い発生や増加の原因を明らかにし、関係機関と協力することによって発生数減少へつながるようにしていきたい。また *S. suis* の農場内への侵入防止や発生の抑制等の対策につなげていくためにも、検出された菌株について病原性や薬剤耐性等の解析を実施していく必要がある。